

3 消費地からのホットニュース、トピックス

(1) 業界紙が選んだ2005年重大ニュース

寒冬で明けた2005年は前年に多発した台風禍の後遺症もあって、野菜・果実とも比較的順調な市況でスタートしたが、夏以降は天候の不安定で市況低迷に苦しんだ年であった。

加えて、年末には大寒波と原油高が交差して、施設園芸農家への影響が懸念されるなど、不安を抱えての越年となった。

一方で、変革の目があらわれた年でもあり、さまざまな変化を前向きにとらえて、今年こそピンチをチャンスに。戌年にちなんで「ワン」ダブルな年を期待したいもの。

改正卸売市場法5月から施行へ

改正法では、商物一致規制緩和、買付集荷の自由化、卸の第三者販売等規制緩和が進み、市場間や市場外等との競争が激化。

卸売会社同志の統合再編

東京新宿青果(株)(年商約440億円)と東京淀橋青果(株)(同、約250億)が6月1日に統合して、東京新宿ベジフル(株)が誕生。

東京市場業界としては第3位を確保して、勇躍出発した。

生鮮野菜、輸入量で過去最高の100万トン台乗せへ

財務省のまとめによると、2005年1月から11月の累計生鮮野菜輸入量は、約98万3千トンに達し、年間を通じて、輸入量の最も多い12月分を予測加味すると、100万トン(前年同期比113%)突破が確実となった。

夏以降の市況低迷で、大型野菜・果実の出荷調整が続く。

年前半は、低温気味の天候で順調な価格を続けた野菜が、6月に入ると作柄遅れの反動もあって低迷と変わり、千葉(銚子)のキャベツが3,000トン、長野産レタスが1,330トンと緊急需給調整事業で圃場廃棄となった。その後も夏秋期のレタス、キャベツ、キュウリ、トマト等、主産県会議による価格浮上対策会議が続いたが、秋冬期に入っても軟調気配で11月から12月上旬までさらに深刻さを増していった。

果実関係も、台風の被害等を受けて不作となった前年とは対照的に秋果実の安定出回りで苦戦が続いた。

このような状況の中で、厳しい年末市況が予想されていたものの、12月20日以降大雪、大寒波の襲来で年末相場は一転上昇の波に乗り、年明け以降への期待をつないだ。

大渇水と大雪大寒波で農家困惑

園芸農産物は生産面で天候の影響を受け、販売面で再び天候の影響を受けやすい。

春先から夏頃までにかけて、西日本を襲った大渇水は、水がめ不足や田植えの出来ない農家が続出。冬場は、北海道から九州までの大寒波、特に日本海側を中心とした大雪と寒波は、12月の記録を更新しながら年が暮れた。

異常気象は、時として事故を巻き込み、生産販売を巻き込むが、気象庁の「温暖化影響も否定できない」という見方もあって予断を許さないものがある。